

ダンサーに必要な要因の研究

A study of the important factors for dancers

1K04B003-3

穂村 礼美

指導教員

主査 杉山千鶴先生

副査 寒川恒夫先生

1. 目的

舞台を鑑賞している際、自然と目が奪われ、観客の心を捉えるダンサーが存在する。その要因として考えられるのが、身体能力と用いた跳躍といった日常では見ることのないハイレベルなテクニックによるものであると考えられる。

しかし、そのようなテクニックとは別の次元で、観客の心を捉え、感動を呼ぶダンサーが存在する。

本研究では、この要因が何であるかを探ろうとするものである。

2. 方法

本研究では、対象をモダンダンスに特化するものとする。

以下の要領で考察を進めていく。

- 1) 先行研究に該当する高橋系子の「踊り手の備えるべき要因に関する研究」を参考に、筆者の考えるダンサーに必要な要因を提示する。
- 2) 世阿弥が残した日本最古の能楽文書である『風姿花伝』を取り上げ、＜花＞という要因の定義を明確に、その獲得方法を考察していく。
- 3) 芸術としての舞踊を考察し、要因としての＜美＞を検討する。まずは、郡司正勝の『おどりの美学』を取り上げ、舞踊を芸術たらしめる要因としての＜美＞を考察する。次に、松本千代栄の『舞踊美の探究』を取り上げ、芸術としての舞踊が身体を素材として用いる難しさと、その克服から得られる独自の＜美＞を検討する。
- 4) 筆者がこれまでモダンダンスのダンサーとして積んできた舞台経験と、舞台鑑賞の経験を通じて得た＜生＞という要因を提示する。

結論) 取り上げた＜花＞＜美＞＜生＞の3つの要因の関係性を提示し、そこから、テクニックとは異なる観客の心を捉える要因を明らかにする。

3. 結果および考察

1) 先行研究の検討の結果、存在感は、内的感情的要因に左右されることが考えられ、この要因を考察することでダンサーに必要な要因も明らかになると分かった。また、あまり重視されていなかった新奇性は、個性の表現として重要な要因であると定義した。

2)より、世阿弥の考える＜花＞は、常に移り変わっ

ていく面白さを持った個性が発揮された存在感である。したがって、真実の＜花＞を持つダンサーは、テクニックを用いず、身体的鍛錬と精神的鍛錬を積みこむことで得られた個々の表現を、身体を通じて、観客に形のないメッセージとして伝えることができるダンサーである。

3)より、モダンダンスと言う舞踊が芸術たらしめる要因としての＜美＞は、一般的な芸術におけるオーラを持った美しさではなく、独特の＜美＞であるとわかる。そして、ダンサーの身体を「大きく」見せるといった存在感としての＜美＞は、テクニックの羅列では生まれないものである。また芸術の素材の難しさを克服することで生まれる、恐怖心や迷いの混ざった＜美＞といった探究が、モダンダンスを面白い舞踊にしている。これらの＜美＞の探究が、＜花＞という存在感に繋がる重要な要因であると考ええる。

4)より、舞台に立つことは、呼吸を感じ、＜生＞きていることを表現することである。舞台という非日常的空間で、身体からあふれ出す＜生＞のエネルギーを感受し、それを生命体であることで備わっている動のエネルギーと共に放出し、舞台を身体の中に巻き込んでいくことを、ダンサー自身が感じることで、観客は舞台の世界に引きずりこまれ、心を捉えられる。

4. 結論

以上より、テクニックの高さとは関係なく、観客の心を捉える要因は、質の良い稽古といった身体的鍛錬と、また舞踊の歴史や人間社会と関わり、民族意識を呼び起こし、自分自身と向き合うことなど多くの学びといった精神的鍛錬を通じて、ダンサーから生み出された常に変化していく目新しい個性を持った存在感である＜花＞である。そして、モダンダンスにおいては、素材である身体を見つめ、試行錯誤する中でから生まれる独特の＜美＞の探究が、面白さといった奇抜性を持った＜花＞へと繋がるのである。

そして、＜生＞という要因は、観客の心を捉える更なる要因であると考ええる。ダンサーの呼吸を通じて＜生＞のエネルギーを感じ、それを舞台に放ち、空間を包み込むほど身体を「大きく」広げ、そこに素材が持つ＜生＞命力を持ったエネルギーが統合して放出されることで、ダンサーの持つ＜花＞という存在感は、一層輝きを増すことができると考える。